

泳能力に差がつく背景とその原因の一考察

阿部 怜 (生涯スポーツ学科 学校スポーツコース)

指導教員 柴田 俊和

キーワード：泳能力，水難リスク認識度，水泳指導法

1. 緒言

筆者は現在，小学校教諭，中・高保健体育科教諭の免許状を取得するため，大学で教職課程を履修している．その過程で教育実習に行き，水泳指導に携わる場面があった．しかし，筆者は泳ぐことがとても苦手であり，水泳指導の際には苦勞した．また，筆者は小学校・中学校・高等学校と水泳の授業を受けている時も，大変苦勞した経験がある．

このような経験から，小学校・中学校・高等学校，また大学で水泳の授業を受けても，泳げない人は泳げないままなのかと疑問を持った．将来，水泳指導に携わる機会のある学生たちがこのような現状では問題があると考え，教員を養成する大学に通う学生が，水泳指導者として備えるべき資質を明らかにしたいと考えた．

2. 研究方法

調査対象は，本学を含む5つの大学の教員免許取得希望の学生150名（男68名，女子82名）．調査方法は対象者全員に対する水泳能力についての選択式のアンケート調査である．

3. 結果と考察

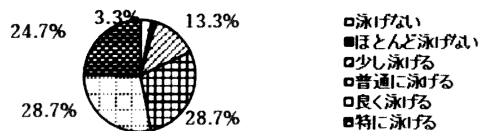


図1 あなたの水泳能力について（過去）

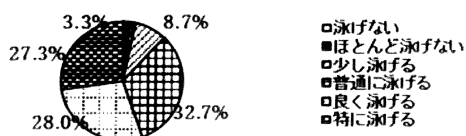


図2 あなたの水泳能力について（現在）

図1は学生全体の自身の過去の水泳能力に

ついて示した図である．図2は現在の学生の水泳能力について示した図である．

調査結果からもわかるように，教員を目指す学生の中には，泳げない学生が2割弱も見受けられた．そういった学生たちが，泳力の低いまま教師になってしまうと，十分な水泳指導がなされない可能性があると思われる．逆に水泳能力がそんなに低くなかった学生の理由としては，スイミングスクール経験の有無が示された．水泳能力を比較したところ，スイミングスクール経験のある学生が泳能力の高いということも明白であった．

4. 結論

本研究では，将来教師として水泳指導に携わるであろう学生を対象に，水泳能力についてアンケート調査を実施した．調査結果をもとに泳力に差がつく背景を考察し，将来教員となる学生が水泳指導者として備えるべき資質を探るろうとした．

過去（小学校・中学校・高等学校）での水泳能力が低かった学生らが，大学のカリキュラムによって泳げるようになったという回答がほとんどいないことがわかった．

調査結果からも，将来教員となる学生が水泳指導者としての資質を備えるためには，大学の水泳カリキュラム，水難リスクおよび水難防止策に対する水泳教育実践プログラム・カリキュラムの検討が今後も求められると言える．

引用・参考文献

合屋十四秋，寺本圭輔，松井敦典（2010）水泳および水中安全能力の実際とその認識．愛知大学研究紀要，60号：35-37，40-44．